

A-XIV-9

Zarit 介護負担尺度からみた頭部外傷者の在宅介護の一傾向

独立行政法人自動車事故対策機構岡山療護センター¹ 診療部² 看護部³ 事務部
○佐野晋作¹, 上野照雄¹, 本多和成¹, 片岡恵美子², 八木良子², 濱野朋子³,
吉田英統¹, 衣笠和孜¹

【はじめに】頭部外傷者の在宅介護は精神的・肉体的・経済的な負担が少なくないことが推察されるが、介護負担に関する実証的な研究は少ない。今回我々は、在宅介護者を対象とした調査を実施し、介護負担感に影響を及ぼす要因の分析を行った。

【方法】当センターを退院後、在宅介護を行っている主要介護者 43 名に対し、無記名自記式質問紙調査(介護実態に関するアンケートと Zarit 介護負担尺度日本語版)を 2007 年 2 月、郵送にて実施。回収したデータの統計解析を行った。

【結果】27 名の有効回答(回収率 65%)を得た。①一日の介護時間と Zarit 各因子には有意な相関を認めなかったが、被介護者を一人にしての外出が「有り」の介護者は、「無し」の介護者より Zarit 総合点・個人・役割負担因子合計点がいずれも有意に低かった。②1 ヶ月あたりの訪問看護利用回数と Zarit 総合点・役割負担因子合計点は有意な負の相関を認めた。他の訪問・通所サービスでは有意な介護負担感の軽減を認めなかった。③Zarit 総合点・個人・役割負担因子合計点と介護年数は有意な関連を認めないが、介護 9 年目までは上昇し続ける傾向にあった。

【考察】①一日の介護時間にかかわらず、短時間でも介護から解放される時間を持つことで介護負担感は減少する。②在宅介護では診療やリハビリよりも看護ケア面での援助の需要が多い。③現在当センターでは在宅介護支援を退院後 1 年間実施しているが、その期間では介護者のニーズを完全には把握できない可能性がある。今後経時的な調査を行うことで、在院時からの効果的な支援・指導に活かすことができると考えられる。